

モニタリング1000里地調査10年の動き

会員 大石章



モニタリング1000里報告書地調査
第3期報告書



環境省のモニタリングサイト1000調査は、高山、森林、湖沼、海などタイプごとの調査サイトを全国1000か所に設定し、100年間の自然環境の推移をモニタリングしようという国家プロジェクトです。

このうち里地調査は、ボランティアの市民調査という形で行うことになり、まず試行的に2005年から10数か所で調査を行い、2008年からてんたの会も加わって全国約200か所での本格的な調査が始まりました。

これだけ大規模な調査ができたことはすごいことですが、中でも里地調査は人家周辺の森林、農地等民有地が対象のため、これまで公的な調査ができず、地域のボランティア調査という形で実現したことは画期的なことでした。



ミヤマカラスアゲハ

10年間の里地環境の変化

里地調査は5年サイクルで3期目になり、昨年11月に生物多様性センター・日本自然保護協会が公表した3期目の調査結果まとめは、各方面に驚きを持って迎えられました。傾向としては、レッドデータブックで絶滅危惧種となっていない普通種が減少していることが判明しました。チョウでは、ミヤマカラスアゲハ、オオムラサキ、鳥では、アオジ、スズメ、哺乳類ではノウサギ、テンなどです。減少率で見れば、本来なら絶滅危惧種に指定しなければならない状況であり、今後の見直しの可能性もあります。

一方、アライグマ、ガビチョウ等の外来種、イノシシ、シカの増加・分布拡大が確認されました。これらは生態系、里山環境に大きな影響を及ぼしています。

こうした傾向は、里山の荒廃により生物が減少しているというこれまでの個別報告を全国データで裏付けることになり、ここまで事態が深刻だったのかという反応を改めて引き起こしました。里山の荒廃は特に開放空間が必要なチョウの減少につながり、チョウ関係者に大きな衝撃を与えました。私が1月に参加したチョウ関係者の会議では、ボランティア調査でデータが正確でないためではないかとの非難めいた声さえありました。



オオムラサキ

調査結果の活用

ボランティアによる調査結果は、当然ですが環境省に報告するだけでなく、市民団体自体で活用されています。ヤマアカガエル減少とアライグマ確認の調査結果により、アライグマを駆除してヤマアカガエルの産卵を復活させたてんたの会などの事例が紹介されています。



リスを見かけることも少なくなった

飯能市長を訪問 しました

昨年十二月、当会が環境省と(公財)日本自然保護協会よりモニタリングサイト1000里地調査三期継続の活動に対して感謝状を頂いた報告として、令和二年二月七日に大久保飯能市長を表敬訪問しました。

モニタリング調査の概要を説明した後、当会が今年八月で二五周年を迎えることについても伝えられたところ、市長さんより長年にわたる飯能市の自然環境保全活動に対して労いと感謝の意を頂戴しました。

こちらからも、飯能市が実施した「景観緑地自然環境調査」は大変貴重なデータになっていくことに感謝を述べ、今後も定期的に行政による本格的な調査を行って頂きたいとお願いをして参りました。

感謝状

浅野 (Shi no)

